夕刊
磐城新聞
五月八日發行
定價（郵稅共）一ケ月金六拾錢　五ケ月金五拾錢
廣告料金　特等一段四拾錢　一等一段三拾錢　二等一段二拾錢　三等一段拾錢
（郵便振替口座仙臺一二番）
發行所　磐城新聞社
磐城郡平町字大町六番地
電話平一番
（日曜祭日翌日休刊）

特別歌壇

祖父

島田忠夫

○梅雨ふかく濕る草屋におほちちは書蚊張垂れて病みゐたまへり
○おほちちの足をもみつつ一日あり庭には柿の花おつる音
○ともしらに梅雨ふりつづく一日ちかく山に鶯なくも
○夕汽車に乘り遲るなと云ひつつも我れの歸りを惜しみてゐましぬ
○いくよさもみとり疲れて家人はおほちちの邊に靈寢して居り
○おほちちは病みて久しく梅雨ふけぬ濕れる家中に蟻上りあり
○庭の上におちてたまれる柿の花赤くこゞしを掃くものもなし
○おほちちも家びともねむる草家に夕ぐれ居れば栗の花にほふ
○衰へてねむりつづくるおほちちに別れも告げず家を出でにけり
○雨の降る我が家の庭に人等居り祖父はまさに死にしものかな
○梅雨ながら軒端をいづるにほちちの棺におつる柿の花かも
○栗の花散り敷きて居りおほちちの終の葬りのおくつきどころ
○年久しく葬りあらざりしわが家の墓におほちゝは入りにけるかも
○おほちゝの黑き棺のかくる間も梅雨ふりやまぬおくつきどころ

續病餘吟

關せん

水戸櫻館

○人聲の隣れの室に細々しこゝに佗びし／わが

一夜ねむ
○糊硬きすすぎのあとのこゝちよさ敷布の上に安らぎいねむ
○寢床變ればねらえぬくせぞ曉と隙間の白むころに眠りぬ

上京近藤先生の診察をうく

○かつて通ひし親み持ちて病院のドアをぞ押しぬ思ひ出づるにほひ
○去年の春宣らせりしこと体質の改造か急務と醫師はまたものらす
○常人のごと思ふにぞ細々しき醫師のいましめをしたに歎かへ
○覺めしわが耳とめて聞くにたゞしづか夜明くる前の靜寂とぞ思ふ
○露にぬれて朝靄なかにいきいきし桑の芽立は目にとまりけり
○おのづから靄へる山に鳥が音のすがしき朝よしばし佇ちきく
○春づける日射しに出でし羽虫あまた目にうるさきをあはれみにけり
○鍬いれてすき返さるる畑土に陽炎もえて乾くにほひす
○清澄めるみ空戀ふにぞこの日らも降るかと思ふ空氣重々し

朝鮮行吟

四

加藤輝雄

○並み蹬ふ山はおしなべて赤き禿山その上に白き雲のたゝなはす
○機械の音頓に靜まり岸壁に白き衣の人ら動く見ゆ
○朝日射す石炭殼の傾斜ふ上に憩ふ人らは思ひなからむ
○下船の人へ船客名簿を照し合ふ刑事に此處まで來つるを思ふ

（童謠詩）

堰　原田小太郎

水馬の滑走
くるくるまはる
目高もならんで

五浦追憶

小松崎芳子

六角堂

先年に案内されて六角堂に行つたとき、其所にいねもやらず端然と座して暗黑の沖を見つめて居られた人々の姿を見た（友といふにはあまりに遠く崇高な姿）

豫期し得ぬ憂愁の漂ふプロフエル。何か知ら其の時の人の姿が今はつきりと記憶に甦へる。

淡い哀愁と追慕に似た感情と共に、浪音高き六角堂にいねられぬまゝきこえ來る千鳥の聲も五浦なればこそか一入あはれ深きを覺ゆるのであつた

人世の行路はあまりに淋しい、殊に幼い者にとつて無力な女性にとつて其の感は深い。

『弱き者よ、汝の名は女なり』と。卒業の折、恩師の賜ひし玉碎の深く身に泌むを覺えて、大觀翁伯庭前から洞窟を拔けて波しぶく巖の上に立つたとき、老松の梢の間から見えた六角堂の美しさを私は今も忘れることが出來ない。朝あけの薄霧に包まれた朱の六角堂。

それはあまりにも美しい自然の配遇であつた、いくたびか歌にしやうとしつゝ出來得なかつたが

旅愁

人は永遠に別れて永遠に逢ひがたし
相結ばるゝことの何ぞおそくして相離るゝことの何ぞ速やかなる

涙なき悲しみなれば永遠に乾ことなし懶き夏の夜
涙なき悲しみなれば名づくべき惱みなしと。

人氣なき芝庭、波音近き老松のかげにまたゝく星を見つゝそゞろ身に泌む旅愁であつた。

情趣ゆたかな五浦の夏宵故にか。ざざ、ざざと寄せては碎け散る波頭の暗にほのめく白さよ

『もりあがる潮の香さみし……』と詠める人の歌境もさこそ。人は生れる。そして多くを苦しみながらも自然の境地に浸されるのであつた。

雅趣一入淒やかな五浦の地にも性格故の淋しきはつきまとふてやまない。さびしさのはてなむ國ぞ。永遠に求め得ぬ境か。

我が魂はいづべに求めいづべに消えむかと。徒らに涙なき悲しみつゝやがて永遠の死に入る。なんと順還的苦迷ふ心空し。五浦と共に思しみと悲しみに充された人ひ出さるゝ忘れ難き人々の嗟嘆せざるを得ない

いく山河越にさりゆかば寂しさのはてなむ國ぞ今日も旅ゆく

春淺き夜、紫雲の漂ふ宵ふつと想ひ出さるる五浦生活六日間であつた。（完）

靈峰羊羹

小川郷驛前
平屋白貨賣店

一心に習つてる。

海

汽船にのつて
青い海
とほへ旅路に
たちました
雲はさみしい
空のはて
浪はさみしい
海のはて
とてもはてない
旅ごころ
鷗のこゑを
聞いてます。

日9月5

△富山、佐賀、宮崎三縣設置（明治一六）△始めて兌換銀行券を發行す（同一七）△國際聯盟理事會開會△佛國總選擧決戰投票の結果政府黨大敗左翼のエリオ派の勝利に歸す（昭和七）

〔社會の今日〕

○年若の追分上手この夏も載せて來よかし鰹釣る船　與謝野寛

葉櫻や遲れて催す春の能　藻刈

講談

劍火無情

(8)

津屋義人作
菅野祐作畫

八丁堀の手先（四）

『御用々々、神妙に致せ』
『手向ひ致さば斬つて捨てる』

同心彦崎道十郎の、烈しい下知はあるが、五十人の捕方は篠崎賴庵の庭前から浮足立つて裏手へ〳〵と逡巡る

もすると捕方に、其姿が見えなくなる。

『ヤツ、右へ行つたか』
『本堂裏へ引返して隣りの寺へ移りはせんか』
『ソレッ、左へ〳〵』

種々な想像で捕方は三人三人は妙子の腕を知つてゐるから容易く近寄れない

薄月夜の卵塔場に凄艶な若い女の立姿。桔槔を背にして屹と睨んで逆立つ柳眉に、三人の捕方は慄として背に冷水をかけられたやう

春とは名のみの寒さ、凍て氷つた井戸端はピシ〳〵と音がした。此寂寞なる中に遙に聞ゆる人聲は

『金杉の通りへ出られて了つた』
『大通りへ出ろ〳〵』

之を聞いた妙子は益々心が落着いた。それは父賴庵が大通りへ遁れたのであつた

身支度をし終つた妙子は物をも言はず進んで、捕方の一人を斬つて倒した

『ヤ、やられた』

殘る二人は斯う言つて、もう逃げ腰になる。其隙に五人と分れて、廣い三味の墓石の間を走り廻る

妙子は墓場の北、旗の生垣一つ越せば芝橋の川べりである、其外へ走り出やうとした時、河岸から廻つた三人の目明し

『オヽ女、御用であるぞ』

墓參者が汲むはねつるべの井戸がある、其周圍には阿迦桶が三々伍々と列べて

其井戸を楯に、懷劍逆手に取つて身構へた妙子

捕方の多くは、皆本堂を駈巡る、妙子はもう此の三人さへ斬れば淋しい河岸の町へ出られると思つたので、心も落着いて平然井戸くしてゐる所へ、同心彦崎道十郎は飛んで來た

『賴庵を取逃がした上、娘までも行方を見失つたか』
『ハツ、まことに何うも』
『まことに何うもではない五十人が唯二人に向つて……しかも手負は十二人……オヽ、此處にも一人、幸死人のなかつたぎやうかう』
『此上は如何致しませう』
『手負の手當は、五六人殘つてしろ、他の者は大通りへ出て金杉橋の方へ十人と札の辻へ十人手別け致せ』
『畏まつてござる』
『ソレ少しも早く』

更に三十何人は血眼になつて北と南へ一散に走つて行つた。

妙子は植の生垣を切破つて遂に芝橋の河岸へ出て了つた

『ソレッ河岸だ？』

本堂の一隊は、此時漸く集まつて來た

『何うした女は……』
『河岸へ出られて了つたか』
『ハツ、まことに何うも』
『まことに何うもではない五十人が唯二人に向つて……しかも手負は十二人……オヽ、此處にも一人、幸死人のなかつたぎやうかう』
『此上は如何致しませう』
『手負の手當は、五六人殘つてしろ、他の者は大通りへ出て金杉橋の方へ十人と札の辻へ十人手別け致せ』
『畏まつてござる』
『ソレ少しも早く』

更に三十何人は血眼になつて北と南へ一散に走つて行つた。

吸入用酸素
電話四〇番

御量度
モノサシ
マス
カリス

御量計
体温器
寒暖計

◎秤ノ取リ方
◎緒・垂・糸・修繕致シ
覆致シマス

開内藥局

春の傑作流行歌
サーカスの唄
濡島の娘
僕の青春
つばめの歌
淺草の夜
（其他五致文致月次致新第早譜注屆速送付）
山澤たし

金光堂時計店
五丁目　電話一九五番

内外
建築材料
建具材
磐城國平町（公園下）
入阿部材木店
電話四九四番

改稱御知らせ
新藤屋（支店）（別館）改め
旅館甲陽館
鐵道省遞信省御指定
店主　武田コウ
平町驛前電話一四八番

◆内臟外科
◆外科一般
◆花柳病科
入院隨意　自炊の便あり
平町田町赤心堂病院跡（電話四七五番）
安齊外科醫院

石城酒造組合主催
優等入選の名酒
辰の口本店
平窪村（電話平二八五番）
販賣店
平町二丁目（電五四六番）

懸賞尋ね自轉車
弊店所有新品車
鑑札番號　福島縣2　一〇四、二八〇番
平臺　六、九四一
右、新品自轉車ハ去ル三月二十二日購入セシガ、四月八日以來行衛不明トナリシ故、發見御知ラセ下サレシ方ニハ懸賞五圓、御屆ケ下サレシ方ニハ、ドナタニ不拘拾圓也ノ懸賞金ヲ差上ゲマス故御心當リアル方ハドウゾ直チニ御知ラセ願ヒマス。
平町三丁目、三六（元郵便局裏通リ）
各國產漆器商
共榮漆器店

世界にきこえる
愛國ミシンの出現
特價一臺金參圓五拾錢
△家庭裁縫の簡易化
一般家庭に於てミシンの便利重寶なる事は皆さんの御承知の通り其の需要を要求して居りましたが從來のミシンは數十圓數百圓の高價の爲一般家庭用として購入出來ませんでしたが今般斯界の大家田島先生の數ケ年の苦心研究によつて斯く大衆向の愛國ミシンが完成され然も突飛的の安價にて從來のミシンと遜色なく便利で各御家庭には必ず常備として一臺なくてはならぬ樣になりました。本機の使用方法は極めて簡單で御子樣方でも三十分位の練習で自由に和洋の御仕立が出來ます。御注文は代引又は前金に願ひます。送料實費）
◎外交員募集
多賀郡石城郡下代理店
平驛前電話三二番
マルカ
店主加藤正保

平町田町（電話五三一番）
高久病院
醫學士　高久忠
新潟醫學士　赤羽清
藥劑士　佐竹菊雄
內科　小兒科
外科　花柳病科
耳鼻咽喉科
レントゲン科

平町南町（元眞木辯護士跡）
專門
氣管、食道科、耳鼻、咽喉科、
增田耳鼻咽喉科醫院
（入院隨意）
電話四八二番

月曜論壇

甦生の湯本全町

湯本町が曩に一大英斷を以て完全なる上水道の敷設を計劃し、三十五萬の巨費と一年有餘の努力を以て滯り無く初期の竣功を告げ、茲に同町積年の懸案を解決したのは良とに慶賀に禁ない事である。惟ふに近代的上水道の完備は吾人日常の保健衛生上乃至火防上苟も市街の形態を備ふる地に於て蓋し一日も欠くべからざる重要緊切の施設で殊に從來飲料水に困める同町の水道完成は正に町百年の大計を樹立せるものと謂ふべく、昨日行はれた竣功式の盛典を永遠に記念せんとする所以である

勞資協調の美風

勞資の協調動もすれば其の圓滑を缺く場合少からざる今日事業主の物故後迄追憶慕の情禁じ難く、磐炭全山從業員が一致結束して假令零碎な額にせよ立ち處に醵金して故翁を仰ぐ德の殿堂とも云ふべき淺野翁頌德記念館を建設した事は時節柄眞に涙ぐましき美談であつていとも感激的であつた昨日の開館式こそ參列者の總てが快く措く能はざる與床しい會合であつた、蓋し故人の遺德を通じて此の握手協調があつて欲しいと思ふ

已を知れ人を知れ

平町會議員選擧運動は先づ候補者の挨拶文書戰に其のトップを切られた、今後加速度的に本格の暗闘に入る事であらうが少くとも將來四年間に亘つて町政に參劃する重要な議決機關を構成する一人を選む上に於て緣故情實により徒に名譽慾に驅らるる凡庸の徒輩を擧ぐべきで無く、須らく選まるる人に己れを知るの明ある事を必要とすると同時に選む人に人を知るの智があつらねばならぬと思ふ、斯くして始めて大平町に愧ぢぬ選擧が行はるであらう

永遠に記念さるべき 湯本水道竣工式

餘興の數々に全町歡喜

昨日未曾有の盛典

湯本一萬五千町民の歡喜は去り、工事功勞者小泉前町長告、鑛夫總代、及海野社長以下の表彰記念品贈呈の事の挨拶あり、來賓側から赤羅る日は來た、此の日朝來一點の雲もなく高く澄んだ碧空、微風だにない絶好の祝賀日和だ、舊校舍内に設けられたさしもに廣い式場も續々詰め寄せる參列員の燦しい姿に定刻前既に滿員の盛況、赤木知事、鈴木、比佐、佐藤三代議士、井上縣議、吉田内郷村長、青沼平町長、沼平町長、井坂組頭、篠原岩堀兩校長等外數氏の祝辭を述べ、未曾有の式典は閉比佐、佐藤三代議士、井上會を宣せられた時正に午前野崎兩縣議以下來賓三百餘十一時半、直ちに山形屋、計一名、石川町長以下町側關係松柏館の二階宴會場に於い者町内代表者等千餘の全員て宴に入つたが午前八時同參集永遠に記念さるべき此校庭を出發した兩小學校生の喜の式典は擧げられた石徒二千名の旗行列は高らか川町長の開辭に次いで吉田に合唱する祝歌に全町を包技師の工事報告あり石川町み入山勞働者、青年團等の長式辭を朗讀後比佐、鈴木假裝行列、新作湯本小唄の兩代議士、吉田入山、菅原手踊、等、々、文字通りの磐炭兩所長、井坂組頭、蓮撒天喜地全町民は心ゆくま沼雄輔の諸氏に感謝狀を贈で此のよき日を祝福した

佐藤、鈴木兩代議士、井上野崎兩縣議其の他數氏の祝辭朗讀あり、最後に前川專務謝辭を述べて同正午閉式直ちに醵業所に於いて祝宴に移つたが同記念館では引續いて餘興に入り和泉流の能狂言を始め伊藤南州氏の講演及活動映寫等あつた、尚屋外では競技部主催のマラソン競爭、花相撲等の餘興あり全山歡喜の裡に盛式を終つた

全山歡喜の裡に 記念館開館さる

知事以下多數の來賓を迎へ

昨日盛大に擧式

磐城炭鑛會社の前社長頌德記念館開館式は慶祝の如く昨七日午前九時半から赤木知事、後藤仙臺鑛山監督局長(各れも代理)鈴木、佐藤兩縣代議士、井上、野崎兩縣議以下多數の來賓を迎へ同社側から海野社長前川專務菅原所長、濱崎部長以下全職員、勞働者代表、役付聯合員、青年團幹部其の他千餘名出席の上同記念館に於いて盛大に擧式、菅原所長の開辭に次いで 君代の知事、後藤仙臺鑛山監督局長(各れも代理)鈴木、佐藤泰樂あり、同社技師倉田氏令孃の手によつて全員起立